

広島藩のお抱え絵師
岡岷山の描いた江戸時代の石ヶ谷周辺を歩く

今から二百年あまり前の江戸時代後期、一七九七年の閏八月（新暦では十月中旬）のことです。

安藝の国広島藩のお抱え絵師、岡岷山（おかみんざん）は、藩主浅野重晟（しげあきら）公の許可を得て、都志見（つしみ）の駒が瀧まで、写生の旅をおこないました。旅から帰ると旅日記風の旅行報告書である「都志見往来日記」と、所要所要を描いた「都志見往来諸勝図」を提出しました。これらは昭和初期に浅野家から広島市に寄贈されました。原爆投下直前に疎開していたので焼失をまぬがれ、広島市中央図書館でマイクロフィルムとして公開されています。

岷山は、駒が瀧だけでなく、途中の風景、特に湯来地区の風景を写生することも目的としたようです。「諸勝図」の絵のうち四割にあたる十五枚を湯来地区で描いています。そのうち、「水内温泉」は三面続き、石ヶ谷峡の「比丘ノ瀬」は二面続きです。石ヶ谷周辺の絵は三枚描いていますが、いずれも石のたたずまいと水の流れの妙を描こうとしたものと思われます。今の風景と絵を比較してみてください。

さあ、さっそく江戸時代から続く小道を歩いてみましょう。

江戸時代



「藝藩通史」(二八二五)

江戸後期の藩内の包括的な地誌。隠居した重晟（しげあきら）公を継いだ斉賢（なりたか）公は儒者の頼杏平（らいきやうへい）に古い国郡志の改定を命じた。編集作業が本格化したのは一八一八年ころからで、村々から報告書を出させて一八二五年に完成した。ここでは菅澤村に付属した絵図を元に、筆で書かれた文字を読みやすく活字化して示した。なお、和田村の絵図に記載されていた地名も赤色で書き加えた。絵図は概念的なもので、距離や方向は正確ではない。

「江戸ゆきツアー」のコース

「江戸ゆきツアー」では、岡岷山がたどった行程を五つに分けて、それぞれ半日のコースとして設定しています。二時間の短縮コースもあるので、スケジュールや体力に応じて選択してください。



「都志見往来日記」「同諸勝図」行程予想図



佐々木さん 守下さん

【発行・お問い合わせ】
「江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみようプロジェクト」
NPO法人湯来観光地域づくり公社
広島市佐伯区湯来町大字多田2545
TEL 0829-85-0670
HP: <http://e-yuki.net> 「となりの里山」

石ヶ谷コース編

江戸の湯来を歩く

湯の山温泉に宿泊した広島藩の絵師、岡岷山は、翌朝、筒賀までの旅程の途中、石ヶ谷峡に立ち寄りしました。周辺では「石ヶ原」「名号石」「比丘ノ瀬」と、三枚の絵を描いています。岷山といっしょに石ヶ谷を歩いて、その場所を確かめてみませんか。



「江戸の湯来を歩く」

江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみよう

湯来地区には、広い自動車道路はありませんが、あちこちに小道が残っていて、のんびり歩くことができます。

このような小道をテクテク歩いていると、これらの小道の歴史を知りたくなりました。

このようないきさつから、私たちは、江戸時代からあった古道を復元する作業をはじめました。そのために使った資料は、「芸藩通志」(1825)の絵図や、藩主浅野家の御抱え絵師、岡岷山の「都志見往来日記」と

「都志見往来諸勝図」(1797)、古老からの聞き取りなどです。

こうして判明した江戸時代の街道について、みなさんに楽しく歩いていただけるルートを選んで、パンフレットを作成することにしました。

石ヶ谷コースは、第二段で、これからも続版を作っていく予定です。

さあ、このパンフレットを片手に、江戸時代からの歴史がある、湯来地区の古道をのんびり歩いてみてください。



比丘ノ瀬



YedoYuki

定価/100円

江戸のいり、湯来を歩く

石ヶ谷コース 半日・2時間コース

「2時間コース」

2時間コースは、石ヶ谷峡の主要部分をゆっくり散策するコースです。湯の山温泉や湯来温泉に入浴されたり、旅行の途中で立ち寄られた方にも、お勧めです。

石ヶ谷峡入り口にある、小丸子山(五)を起点にすると便利です。無料の駐車場とトイレがあります。また石ヶ谷峡には、夫婦淵(十一)の先にも東屋とトイレがあるので、のんびり歩いてお弁当をひろげるのに便利です。時間があれば、石ヶ原(三)や一の瀬地蔵(二)まで足を伸ばすのもいいですね。

阿南坊城跡(一)に登山道はありません。

【半日コース】

① 阿南坊城跡

丘陵先端に位置し、主郭と南西隅下の小郭からなる。登山道はない。昔話では、落城のとき下伏の備前坊が護衛し相撲取りの鶴瓶(つるべ)が城主の名張将監(なはりしよ)うげんを背負って逃げたと伝わる。石積みと五輪塔が現存する。

② 一の瀬地蔵

伏谷川の右岸、湯の山方面と多田方面との分かれ道沿いにあった。明治一五年に国道が左岸側に移動したとき地蔵も一緒に移動させた。国道をはさんで向かい側にある、屋号を「地蔵」とい合う民家も一緒に移転した。



③ 石ヶ原

ルース台風の大洪水(昭和二三年)で河道が変わってしまったが、湯来つり堀付近には昔の面影が残っている。

④ 百跳び

水内川に、たくさんの岩が顔を出していて、岩を伝って渡ったという。むかし、塩の入った吠(かます)を背負った一人づれが水中に落ちたが、相手を先に立たせようと遠慮しあつた...という笑話が残っている。

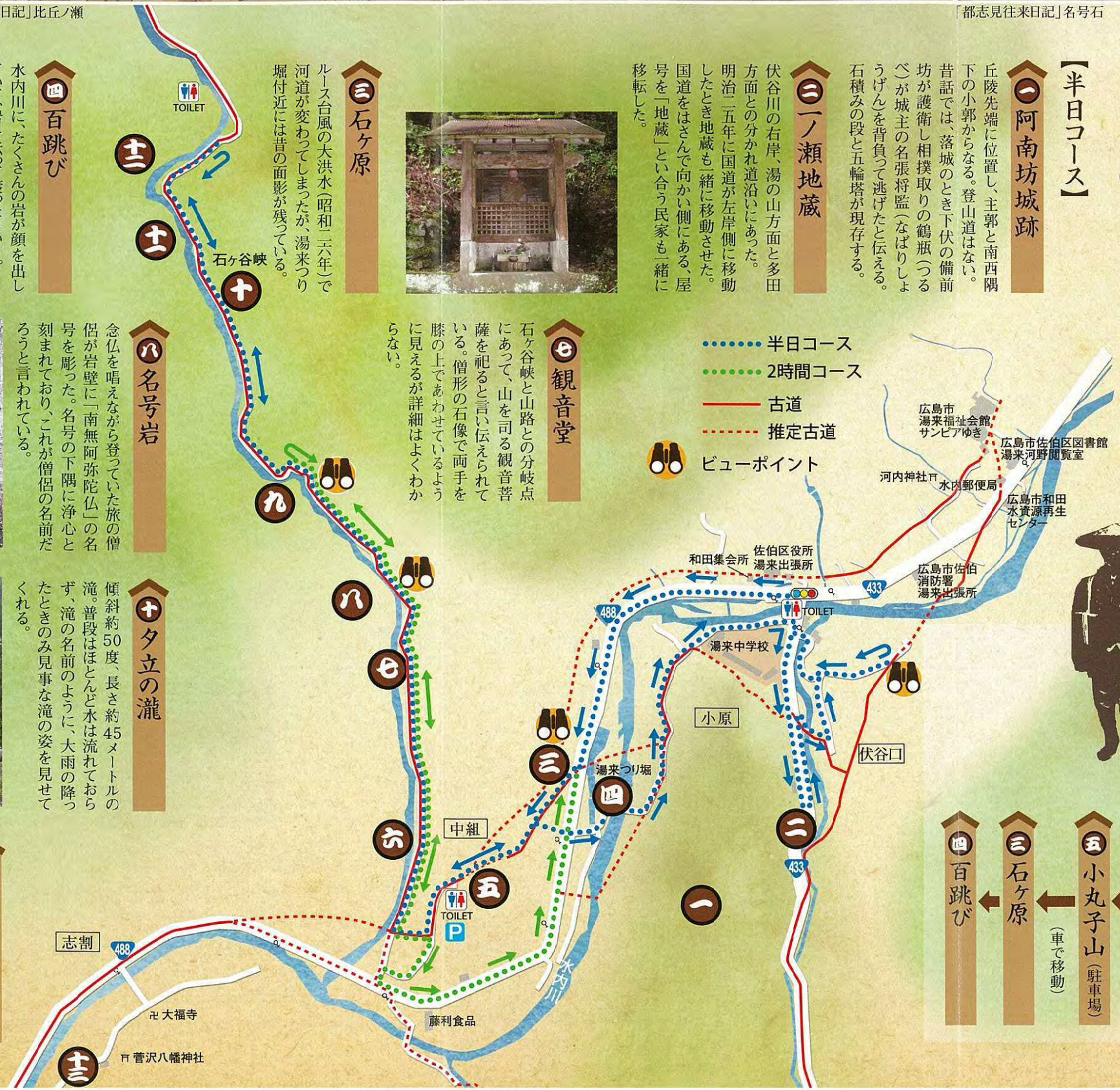
⑤ 小丸子山

水内断層の作用によって形成された小丘陵(ケルンバット)。北側の鞍部(ケルンコル)が断層の直上にあたる。むかし、この小山の裾を回るコースで競馬をしていたという。ここは小さな公園になっていて、駐車場とトイレがある。

⑥ 一枚板の橋

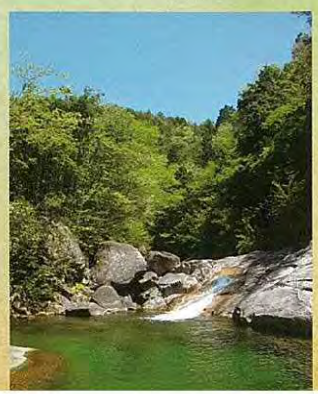
石ヶ谷川には岩伝いに一枚板を掛け渡した橋があって、岷山の「石ヶ原」の絵にある風景を彷彿とさせる。

- ⑤ 小丸子山(駐車場)
- ⑥ 観音堂
- ⑧ 名号岩
- ⑨ 比丘の瀨
- ⑤ 小丸子山(駐車場)
(車で移動)
- ③ 石ヶ原
- ④ 百跳び



⑪ 夫婦淵

エメラルドグリーンがひととき美しい。湖の先は浜になっている。



⑫ 粟柱

むかし、二人づれの旅人が訪れて、その二人が住み着いた。この人の粟は特別に大きく茎も柱のように太かった。村人も貰い受けて大きな粟を作ったので粟柱と呼ばれるようになったが、いつのまにか、普通の大きさの粟にもどってしまった。

⑩ タ立の瀧

傾斜約50度、長さ約45メートルの滝。普段はほとんど水は流れておらず、滝の名前のように、大雨の降ったときのみ見事な滝の姿を見せてくれる。



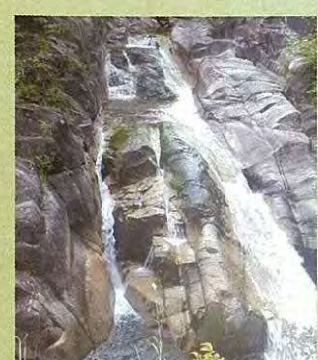
⑪ 出合いの瀧

対岸から落ちる滝と本流の滝とが出会うことから、「出合いの瀧」とよばれる。



⑫ 比丘の瀧

高さ6メートル。滝壺から直角に流れをかえている。滝壺は深さ5メートル。中で渦を巻いている。



「都志見往来日記」石ヶ原
岷山「都志見往来日記・同諸勝図」より 広島市立中央図書館 所蔵

「都志見往来日記」比丘ノ瀧

「都志見往来日記」名号石